

黒田鵬心の大正期における出版活動とその背景

正会員 ○ 本橋仁*
正会員 ○ 中谷礼仁**

黒田鵬心 趣味叢書 アーツ・アンド・クラフツ運動
趣味之友 趣味講座 大正期新興美術運動

1 研究背景 はじめに

関東大震災(1923)後の東京において、新興美術運動家達による一連の建築作品群が現れた。¹大正期における建築と美術との近接をあらわす事実である。しかし、美術と建築との近接は、伊東忠太の「アーキテクチュールの本義」²から連綿と続き、「都市美」の観点³や「形成芸術」⁴としての建築作品など既に存在した。近代日本最初の建築批評家と評価がなされている黒田鵬心が、美術界の土壌から生まれてきたことは興味深い。明治末期より、建築に関する盛んな発言が認められる黒田であるが、彼の出版活動の対象は、建築を専門としない一般大衆におかれていたことはあまり知られていない。

本研究では、黒田の出版活動を、この建築と美術の近接を生み出す一要因として捉え、研究を行う。

既往研究

黒田に関する研究の嚆矢は、谷川正己「趣味叢書にみられる都市美観について」(1968)⁵である。また現在では、藤岡洋保「近代日本最初の「建築評論家」黒田鵬心の建築観」(1990)⁶により、建築評論家としての評価がなされている。また、近年、東京大学都市建築史伊藤研究室において、「都市美」「批評」という観点から黒田が再評価されている。その主要な論文として、宮脇哲司「建築批評を成立せしめたもの - 明治から大正、建築批評に通ずる建築/美術の言説研究 -」(2009)⁷が挙げられる。

本研究の目的

前述のように、黒田の詳細な分析は既に行われてきた。しかし、これまでの研究は「建築」「美術」分野における影響関係を述べるにとどまっていた。本研究において、未だ評価がなされていない『趣味叢書』『趣味之友』『趣味講座』に焦点を当てることで、黒田の活動全般に通底する理念を明らかにする。そして黒田の新しい側面を明らかにすると同時に、大正期の美術運動と建築との関わりを明らかにする。

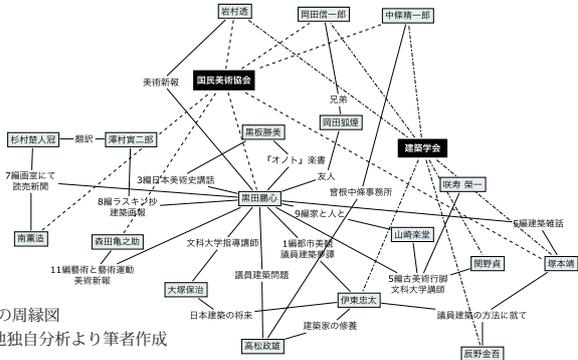


表 1. 黒田鵬心の周縁図
既往研究その他独自分析より筆者作成

2 黒田鵬心「趣味」の概念

一般的な「趣味」の解釈において、明治から大正にかけて変化が認められる。市川陽子(1995)⁸によると、明治40年(1907)ころから一般的にもちいられ、一般階級においても近代思想としてとりいられる様になったとされている。当時の趣味という語の定義付けは曖昧である。そのため、黒田の趣味の用法をみる。用いた資料は、趣味叢書第2編『趣味雑話』⁹における「趣味に関する二三の問題」である。黒田は、趣味を「藝術鑑賞力」と述べている。後述する「趣味講座」等、黒田の一連の活動においては、この芸術鑑賞力を向上させる狙いがあったものと考えられる。黒田の最初期の建築批評とされる「帝都の美観と建築」¹⁰においても社会を意識し、軽視されている「建築」を趣味普及をもって都市美観を高めたいという意図のもと行われたことが述べられ、社会的意識を読み取ることが出来る。

3 大正期における出版活動の変遷

3-1. 趣味叢書 (1914.2 ~ 1915.12)

編 号	書 名	著 者	序文執筆者	発行年	出版社
1	都市の美観と建築	黒田鵬心	伊東忠太	1914.2	-
2	趣味雑話	黒田鵬心	若村透	1914.3	趣味叢書発行所
3	日本美術史講話上巻	黒田鵬心	塚本善美	1914.5	趣味叢書発行所
4	建築雑話	黒田鵬心	塚本善美	1914.6	趣味叢書発行所
5	古美術行脚	黒田鵬心	関野貞	1914.7	趣味叢書発行所
6	日本美術史講話下巻	黒田鵬心	-	1914.10	趣味叢書発行所
7	画室にて	南薫造	-	1915.3	趣味叢書発行所
8	ラスキン抄	ジョン・ラスキン	-	1915.5	趣味叢書発行所
9	家と人と	山崎実堂	-	1915.7	趣味叢書発行所
10	青山より	黒田鵬心	-	1915.8	趣味叢書発行所
11	藝術家と藝術運動	森田亀之助	-	1915.10	趣味叢書発行所
12	美術と社会	若村透	-	1915.12	趣味叢書発行所



↑ 図 1. 『趣味叢書』書影

← 表 2. 『趣味叢書』発行リスト

『趣味叢書』は、大正3年(1914)2月7日から、大正4年(1915)12月16日に12巻刊行された。大きく二期に大別することが出来る。第1期は黒田鵬心により全て執筆され、第2期は、『青山より』¹¹を除く全てが、他者により執筆された。前述したように、第1巻の発刊は、読売新聞社との退社の時期と合致、その完結は『趣味之友』の創刊へと繋がる。第1期6巻の内、3巻はそれまでの新聞や雑誌への寄稿の再収録である。一方、『古美術行脚』¹²『日本美術史講話上・下』¹³は、新規に書き起こされたものである。

黒田にとって、建築への興味は、日本美術の興味からもたらされた。建築への最初のアプローチは、在学中、関野貞の主催する研修旅行「関西エキスカレーション」への参加であり、それは日本美術への興味が影響したものであった。¹⁴『日本美術史講話』も後には、装丁し直して様々な出版社より再販され続けるなど、その興味は続いていく。¹⁵

3-2 趣味之友 (1916.1 ~ 1918.10)

大正5年(1916)1月から大正7年(1918)10月まで、全33巻発行された月刊誌である。『趣味叢書』に続き、黒田自身により企画された。黒田は、17号まで主幹を務めた。毎号110頁程で構成されており、発行所は「趣味之友社」である。¹⁶ 創刊号における黒田の記事「趣味講壇」において、発刊の意図がのべられている。その内容は、前述「趣味に関する二三の問題」において「趣味教育」の必要性を説くに留まっていたのに対し、より具体的な方法論が提示されている。創刊号で、国学者上田萬年(1867-1937)が寄せている記事、「趣味の涵養と本誌の使命」¹⁷において、『趣味之友』を「趣味の総合大学」を作ろうとしているのだらうと要約されている。また、黒田主幹の時期にのみ、建築家の論考が認められる。山崎樂堂(静太郎)の鼓に関する連載だけでなく、より建築に関する専門の記事も散見される。例えば、「関野貞の朝鮮の藝術 古蹟調査事業の進捗」¹⁸や、伊東忠太の「冬の住宅に就いて」¹⁹、武田五一の「晚霞楼式の住宅(Bungalow)」²⁰等が挙げられる。²¹



図2『趣味之友』書影

3-3 趣味講座 (1916.9 ~ 不明)

大正5年(1916)9月より発刊された。これは、講話の形式で平易に記述された冊子が、購読者に届くという形態をとっていた。「趣味講座」の計画は、すでに1号の時点からあった。正式発表されたのは『趣味之友』7号(大正5年7月)であり、「開設の趣旨」²²が誌面に発表される。専門的知識の無い人々を読者に設定したことで、趣味教育の理想型に近い形態となったことを、黒田自身が述べている。教育的な視点をより強めたことは、「* 藝術大学の現出 *」と銘打たれた広告が、大正6年(1917)1月の『美術週報』に掲載もされたことから分かる。



図3『趣味講座』書影

4 考察 / 黒田鵬心の社会に向けられた視点について

黒田の活動、特に出版の変遷を見ると、対象がより一般社会へ向けられていったことが分かる。黒田は「社会」を強く意識した。²³ 前掲、藤岡(1990)の先行発表である1988年発表の同表題の論文²⁴において、藤岡氏は黒田の活動の特徴から、ジョン・ラスキン(John Ruskin, 1819-1900)・ウィリアム・モリスからの影響を指摘していたが、直接的な明示でなく示唆にとどまっていた。そこで、黒田の社会志向について、ウィリアム・モリス(William Morris, 1834-1896)らの西欧における芸術運動からの影響を考察する。

『趣味叢書』最終巻は、岩村透『美術と社会』²⁵であった。岩村は、この中でアーツ・アンド・クラフツ運動の旗手としての、モリスを取り扱っている。岩村は、同著の中で、モリスを「趣味的改革者」と紹介している。

明治43年(1910)の幸徳秋水の殺害された大逆事件以降、モリスの社会主義の一面が未だ強く日本においてモリス受容が中断されていた時期であった。²⁶ 一方、黒田は、『美術と社会』発表直後の「趣味講壇」の中で、ウィリアム・モリスに賛同し、感服するという旨を、実際に述べたのである。

趣味の世界は、利害とか金銭とかいふものを離れた無邪気な世界であります。彼の社会主義者の理想は、趣味の世界に於いてこそ完全に実現されると思ひます。ウィリアム・モリスが「趣味的社会主義」を唱へたのは、大なる卓見であつて、我々の感服し賛同する所であります。

黒田鵬心「趣味講壇」趣味之友,1号(1916.1)より

改めて、『趣味叢書』で展開された各書籍を再び見ると、第8編に澤村寅次郎訳『ラスキン抄』²⁷、第11編にバーナード・リーチ(Bernard Howell Leach, 1887-1979)との交流が確認されている森田亀之助による『藝術家と藝術運動』²⁸、第12編に岩村透『美術と社会』の出版がなされ、いずれも、当時の日本に、西欧の芸術諸運動を知らせる重要な書籍であった。



図4『美術と社会』見開き

5 結論

黒田鵬心の建築批評家としての側面は、日本近代建築史における重要な指摘である。しかし、本研究において、出版活動の変遷をみていくと、そこには読者として一般大衆を求めてたことがわかった。そこには、「趣味普及のため」という黒田の活動全般に通底する理念が存在した。

黒田の一連の活動を考えるとき、「美術」「建築」という二項対立から、「社会」という軸を加え考えなければならない。そして、この黒田の理念の源流には、同時代に西欧で起こっていた、ラスキン、モリスらの、芸術の諸運動の影響を見ることが出来た。本研究により、黒田の活動の新側面を明らかにした。

謝辞

本研究にてお世話になりました、谷川正己先生、長谷川堯先生、岡山理香先生、宮脇哲司様に厚く御礼申し上げます。

注釈 1. 長谷川堯. 日本の表現派. 近代建築. 近代建築社, 1968. 2. 伊東忠太. 「アーキテクチュラル」の本義を論じて其譯字を撰定し我が造家學會の改名を望む. 建築雑誌. 日本建築学会, 1894年8巻90号, p.195. 3. 黒田鵬心. 佐藤功一により提唱. 4. 村山知義ら. 大正期の新興藝術家により提唱. 5. 谷川正己. 趣味叢書にみられる都市美観について(計画意匠歴史). 日本建築学会東北支部研究報告集, 1968, vol. 0, no. 11, p. 90-93. 6. 藤岡洋保. 近代日本最初の「建築評論家」黒田鵬心の建築観. 日本建築学会学術講演梗概集F, 日本建築学会, 1988. 7. 宮脇哲司. 建築批評を成立せしめたもの—明治から大正、建築批評に通ずる建築/美術の言説研究—, 2009, 東京大学. 伊藤研究室における研究として他に、京谷友也. 都市美の観念 20世紀初頭・日本における都市美観に関する言説の研究. 2008, 東京大学. がある. 8. 市川陽子. 「趣味」と「住宅」. 1995, 早稲田大学. 9. 黒田鵬心. 趣味雑誌. 趣味叢書発行所, 1914. 10. 黒田鵬心. 帝都の美観と建築. 東京朝日新聞, 1910年, 11月25日, 6面. 11. 黒田鵬心. 青山より. 趣味叢書発行所, 1915. 12. 黒田鵬心. 古美術行脚. 趣味叢書発行所, 1914. 13. 黒田鵬心. 日本美術史講話. 趣味叢書発行所, 1914. 黒田鵬心. 日本美術史講話下. 趣味叢書発行所, 1914. 14. 関野貞は、文科大学において黒田が受講していた講座にて置いて日本美術を担当していた. 15. 三星社出版部. 三陽道出版部. 荻原星文館など、確認できる範囲で、1933年まで版が重ねられている. 16. 黒田自身により設立. 17. 上田萬年. 趣味と涵養と本誌の使命. 趣味之友, 趣味之友社, 1916年1月, 1巻1号, p.24. 18. 4号(1916年4月)所収. 19. 12号(大正5年12月1日)所収. 20. 7号(大正5年7月1日)所収. 21. 詳細な研究はここでは出来なかったが、今後の建築史研究に寄与できる可能性を持ち得る. 22. 黒田鵬心. 「趣味講座」開設の趣旨. 趣味之友, 趣味之友社, 1916年9月, 2巻9号, p.21. 23. これまでの黒田研究は、美術・建築という二項対立の中で行われてきたが、本研究では社会という軸を据えた. 24. 藤岡洋保. 近代日本最初の「建築評論家」黒田鵬心の建築観. 日本建築学会学術講演梗概集F, 日本建築学会, 1988. 25. 岩村透. 美術と社会. 趣味叢書発行所, 1915. 26. 石崎等. 芥川龍之介とW・モリス—大正期モリス受容を媒介とした《美学イデオロギー》分析. 2004, 立教大学. 27. 澤村寅二. ラスキン抄. 趣味叢書発行所, 1915. 28. 森田亀之助. 藝術家と藝術運動. 趣味叢書発行所, 1915.

* 早稲田大学創造理工学研究科建築学専攻博士課程 *Graduate Student, School of Creative Science and Engineering, Waseda Univ. M. Eng

** 早稲田大学創造理工学研究科建築学専攻准教授 **Associate Prof, School of Creative Science and Engineering, Waseda Univ. Dr. Eng